

サンプル問題の分析と教訓：ご自身の「方法論」確立に向けて

1. 前提作業：参考答案とご自身の答案を比較する。
 - (1) 比較の観点1：参考答案を読んで、理解できないところがあるか。
参考答案を読んで、知らなかった事項があるか。
 - (2) 比較の観点2：参考答案のような答案が書けたか。
→「知っているのに」、「分かっているのに」、何故、書けないのか。

2. 到達点の確認と原因分析：「どこが、どうして、うまく行かなかったのか。」
 - (1) 「理解」について：「理解」の3つのレベル
 - ①レベル1：「書いてあることが分かる」。
←日本語で論理的だから、当然。それで安心してドンドン進んでよいのか。
 - ②レベル2：「しっかりしたレポートを書ける」。(=咀嚼し、まとめる能力)
←答案を書く「現場」では、文献参照不可、時間制限あり。
 - ③レベル3：「時間的制約のもと、六法のみで、水準を備えた答案を書ける」。
←これが「**到達点**」。①②が前提、しかし、それらと異なる「**隔離した能力**」。
 - (2) 学習の「方向性」：「**隔離した能力**」を身につけるための**注意点**
 - ・朝から晩まで本を読んでも、この能力は身につかない。
 - ・到達点を明確に、**具体的に意識**したほうがよい。
 - ・「暗記していればできる」というのは誤り。どの試験でも試験問題は過去問と同一ではなく、「丸暗記」は役に立たない。したがって、「基礎」、「基本」を「記憶する」のは当然の前提として、それを「使いこなす」能力が必要。
 - ・「基礎」、「基本」を**理解し、記憶し、使いこなせる**ようになるには、「絞り込んで繰り返す」(=**辛い作業**)しかない。問題演習はその「方法」。
 - ・唯一絶対の学習方法はない(各人には相性がある)。しかし、何でもよいというわけでもない(→先輩の話や合格体験記等で情報収集する)。
 - (3) 代表的な方法の1つ：葉一『塾へ行かなくても成績が超アップ！ 自宅学習の強化書』(フォレスト出版、2020年)からのランダムな抜粋
 - ・「知っている」と「できる」とは違う。
 - ・「できる」ようになるまで繰り返す。
 - ・成果を出すには、「知っている」のではなく、「できる」ことが大切。
 - ・問題演習をどんどん進めたがる。答え合わせをしたら、それで終わり。
 - ・まずは、友だちから「まねぶ」。自分に合いそうなものを選ぶ。
 - ・ドリルや参考書は、自分で手に取って選ぶ。
 - ・勉強が「作業」になってはいけない。
 - ・勉強は「時間」ではなく、「勉強量」で決める。
 - ・先生に聞く前に、自分で答えと解説をしっかりと確認する。
 - ・予習は余力があれば、あくまで復習メイン。
 - ・教科書で勉強したら、必ず演習問題をセットでやる。
 - ・教えるつもりでアウトプット(インプットだけではインプットできない)。

(4) 「原因」の探求：代表的な2つの「原因」

- ①人によって異なる原因：ご自身で「原因分析」をし、方法論を修正し確立する。
→問題演習も、極論すれば、「原因分析」のため。「チャレンジ→原因分析→チャレンジ→原因分析」のサイクルで、ご自身の**方法論**を確立する。
- ②代表的な原因その1：知識不足
- i) 「読めば全部知っている」と「何も見ないで、過不足なく書ける」の落差。
 - ii) 試験で試されるのは、分かっているかどうかではなく、書けるかどうか。
 - iii) 知識は、理解し、繰り返し、身につける。その場で「使える」ようにする。
 - iv) ただし、「暗記していれば何とかなる」というほど甘くはない(前述)。
- ③代表的な原因その2：ペース配分 (→**方法論**)
- i) 基本的発想：問題文を読むのに何分、論ずべき事項を拾い上げに何分、答案構成に何分、実際に書くのに何分、という発想を**意識**する。
 - ii) 試験「現場」：問題文を読みながら、論ずべき事項を拾い上げ、もう一度問題文を読み直しながら、「答案構成」を検討し、そして、考え方をまとめた上で書き始める、というのが普通であろう。
*考え方がまとまっていない段階で書き始めると、うまく行かないことが多い。ただし、「非常時」の対策はあらかじめ考え、それを試しておく。
 - iii) 「答案構成」の意味：答案構成(=「問いに答える」)とは、すなわち、
 - α) 何を書き、何を書かないのか、
 - β) どの順番で、どのような「流れ」で書くのか、
 - γ) それぞれについて、どの程度の分量を割くか(=どこに力点を置くか)、という判断作用を含む「複雑で」「知的な」作業。「体得」には時間がかかり、巧拙も分かれる(ベースは出題趣旨を読み取る能力)。

3. サンプル問題から得られた教訓と課題：「今、何をすべきか。」

- (1) 自分の答案と参考答案を比較する(前述)。感覚をつかみ、呼吸を覚える。
- ①「写経」で体得すべきは「呼吸(リズム感)」。
*プレゼン技法(→IRAC)習得のため、参考答案を実際に書くのも一法。
 - ②段落を1つのブロックと考え、分量を考えながら、それらを積み上げていく。
 - ③とにかく答案(≠参考答案)を書かなければ、何が書けないかが分からない。
- (2) 基礎的事項を習得する。
- ①手を変え、品を変え、飽きないように、絞り込んで繰り返し、「基礎」、「基本」を定着させ、そして、それを使いこなせるようにする。
→最先端の知識はおもしろいし、知的好奇心を満足させてくれる。しかし、それで基礎的事項が身につく(=書ける)のであろうか。
 - ②所期の目標との関係で、「勉強とは、何か」を考える。
- (3) バランスには注意：足りないことは沢山ある。しかし、時間は「無限」でない。
- ①何に、どれだけ時間をかけるかを考える(全問について答案作成するのか)。
 - ②どの時点で、何をするかを考える(スケジューリング [=順序] の重要性)。
*いつの時点で、どのくらい時間をかけて、どのような方法で、補うか。

4. 本書の目的

(1) みなさんにとっての目的：ご自身でカスタマイズ。

(2) 著者にとっての目的：民法が好きになる、もっと勉強したくなる。

①成果を実感できる → 好きになる → 得意になる：やがては実務家や研究者。

②想定している読者：伝達技法の指南書（＝入門書）。

i) 資格試験や大学院進学を目指している学部学生のみなさん

ii) 法科大学院3年課程1年生のみなさん

iii) そのほか、民法に不安や苦手意識のあるみなさん

*民法が好きで得意になれば、要件事実論はあまり心配しなくてよい。